

ほっと通信



特別支援センターが設置され、丸3年になろうとしています。巡回相談の依頼内容にも変化が見られます。一度巡回訪問した児童・生徒について、成長や課題を再度把握し、支援を練り直したいという依頼が出てきています。

特集：通常の学級における工夫や配慮

一人一人の子どもは、それぞれに異なる教育的ニーズをもちながら教室で学んでいます。どの子どもにとっても楽しく学べる、わかりやすい授業は、特別な支援を必要とする子どもたちにもわかりやすいものです。そこで本号では、特別な支援が必要な子どもたちにもわかりやすい、通常の学級の授業における指導の工夫や配慮について考えてみたいと思います。

一人一人が大切にされた、説明文の読み取り学習

<高嶺小学校 大西恵理子先生の授業から>

約30人の2年生のクラス。授業は国語の説明文「さけが大きくなるまで」の学習で、前回の授業で学んだ段落の内容の復習をしてから、新しい段落を学習していました。どの子ども落ち着いて学習に取り組んでいるだけでなく、すすんで意見を発表する姿が印象的です。



授業を参観して、3つの工夫に気づきました。

(1) テンポの良さやメリハリ

段落ごとに動的学習と静的な学習が次のように組み合わせられることで、子どもたちも集中できていました。段落の音読(動的)、発問をもとにした内容読み取り(静的)、板書された段落の要旨をノートに書き写す(動的)。

(2) 静的な学習「読み取り」での視覚的教材の活用

視覚的教材は、聴覚的情報の処理が苦手な子どもへの支援として有効です。それだけでなく、視覚的教材はどの子にとっても興味を引きやすく親しみやすいので、有力な支援を可能にしてくれます。鮭のすみかの場所の絵を貼り、その上で鮭の絵を動かしながら「鮭はなぜ川上に行くのですか?」という発問。教材に即して分かりやすく視覚化されることで、それまであまり積極的に参加していなかった子ども、絵を使った質問や説明ではじっと見て話を聞こうとする姿がありました。

(3) どの子の意見も大切にされる

発表され全体で確認した内容を、また発表した子がいました。そんな時も、先生は「よかったよ。もう一つあるんだ」と、子どもの頑張りや意欲を認めることばで応じていました。

これらの工夫の他に、先生は読んでいる箇所を指さしてそっと教えたり、机の間を回りながら板書を写すように短い声かけをされるなど、さりげない個別の支援もされていました。

授業を参観しながら、「特別支援教育とは『一人一人の子どもが大切にされる一斉授業の工夫』と『個別のさりげない支援』なのではないか、そして、そのバランスが重要なのではないだろうか」と思いました。その瞬間、算数（少人数）の教室移動の時、のんびり座っている友だちに「さん、隣の教室だよ、行こう」と声をかけ合う子どもたちの様子が思い出され、「一斉指導の中での個別の支援を支えているものは、クラスの雰囲気ではないだろうか」と思いました。

友達同士がかかり合って学ぶ授業



<長池小学校 寶田邦子先生の家庭科の授業から>

4人ごとの班に分かれての調理実習でしたが、一人一人が自分で「野菜炒め」を順番に作るという授業でした。野菜については、家で切ったものを各自が持って来るようになっていました。1人ずつ調理を行い、班の全員の調理が終わったら、試食です。自分の野菜炒めを試食し、その後、班のメンバーで交換試食。班での試食が終わったら、他の班の友達と交換試食をしました。多くの友達と交流するために、この時は立食もOKです。試食後、道具を片付け、クラス全体で試食した感想を出し合い、野菜炒めに関するポイントを整理しました。調理実習を終えて教室を出る子どもたちの表情には、「楽しかった」という気持ちが満ち溢れていました。

この授業を参観して、授業の工夫として以下の点に気付きました。

(1) 分かりやすい説明・指示の工夫

無駄を省いた分かりやすいことば。指示は黒板にも書かれていました。例えば、身支度から調理道具を整える段階までの指示を出し、そこまでできたら次の指示を出すというように、一度に出される指示は2つから3つまででした。

(2) すべての子どもに見通しをもたせる説明の工夫

調理実習の流れは、既に、前回の授業で説明されていました。当日の授業で、あらためて調理実習の流れが説明され、黒板にも簡潔に記されていました。調理の手順はプロジェクターを使って視覚的に確認できました。授業最後に、次回の授業の内容も説明されました。

それらの工夫と同時に、全く違う視点の工夫にも気付きました。

(3) 子どもたち同士が学び合う仕組みの存在



「材料の野菜は3種類」というだけで、どの野菜を使ってもよいことになっており、子どもたちの料理の中にはじゃがいも、さつまいも、トマト等の野菜も見られました。「トマトってどんな味がするの？食べていい？」と言って交換試食する姿、「(同じ材料だけど)自分の炒めたものより甘い！」と言って理由を考える姿がありました。そして、経験して感じたことをみんなとことばにしあって、野菜炒めのポイントを整理する子どもたちの目は、真剣そのものでした。

調理は個による学習でしたが、実習全体では友達とかがわりあって学ぶための仕組みがあり、その仕組みのために材料設定の工夫や試食形態の工夫があったと思いました。

友達同士がかかり合って学ぶことで、子どもたちは支え合って互いに伸びることが出来ます。このような友達同士がかかりあって学ぶ仕組みも、特別支援教育に通じる大きな工夫ではないだろうかと感じました。いろいろな子どもたちが支え合って伸びていく工夫について、これからも探していきたいと思いました。

道徳の時間は漢方薬のようなもの



<南大沢中学校 主任教諭 鴨狩淳一先生>

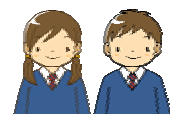
初任の頃、先輩の先生から「中学校では一年生で何をしたのかで3年間が決まる」と教えていただきました。あれから12年が経ちます。私は一年生の学級開きの時に「中学校では、みんな白紙からスタートすることができるんですよ」と話します。誰もが新しい環境に身を置いた時、「こうありがたい、こういう人になりたい」と思うのではないのでしょうか。入学してくる生徒の中には、小学校での失敗などを引きずって、良いスタートが切れない生徒がいます。その不安を断ち切ってあげ、新しいスタートを応援する意味でも必要な言葉だと思っています。

ある生徒が、三者面談で「初めての中学校生活に不安を感じていた時、白紙からスタートできるという言葉聞いて楽になりました。なんだか嬉しくなりました」と言っていました。語りかけて良かったと思った瞬間です。そういうきっかけをクラスで増やしていくように考えています。

私が教育実習を受けた中学校の主(ぬし)のような先生が「もし生徒が頭髪を茶髪に染めてきた時、真正面から向かい合い、話せる教師になれ。そして、その生徒の気持ち、境遇を考え、その生徒になったつもりで自分に何をしたいのかを考え、解決してあげられるかが大切だ。忘れるな」と話して下さいました。今も心に残る言葉です。

私は道徳の時間を大切にしています。道徳の時間とは漢方薬のようなもので、即効性を求めるものではなく、生徒の内面に迫り価値の自覚を深めさせること(行為までは求めない)を目的とした、大切な時間としてとらえています。同時に、道徳のねらいに照らし、生徒の実態に合わせて、生徒一人一人が自分の生き方の課題について深く考えたり、気付いたりする時間であり、語り合いや聞き合い、考え合いを行える場であり、生徒が活躍できる場の一つであると考えます。教師はいかに生徒の言葉に耳を傾けられるか、そして生徒一人一人に一番合った言葉を選び声をかけられるか、常に考えています。

教師がねらいからぶれないために、道徳の資料の分析、ねらいとする価値の把握、発問構成等には膨大な時間がかかりますが、生徒が成長していく過程において、道徳の果たす役割は大きいのではないかと思います。日々邁進しているところです。揺れ動きながらも成長していく生徒を支えつつ、共に学校生活を送ることは何よりの喜びであり、楽しみでもあります。



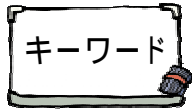
<心理士の学び>

価値の多様性を伝える指導

子どもの中には、相手の気持ちが理解しにくい子や、「1番」に強くこだわる子がいます。このような子だけではなく、どの子にとっても、「君は1番であることを大切だと思うんだ。私は努力することが大切だと思っているよ」と子どもの価値観を否定せずに新しい価値観を伝えていくことは重要であり、その具体的な工夫が鴨狩先生の「クラス便りにクラス全員分の感想(ペンネーム使用)を載せる取り組み」などであろうと思いました。また鴨狩先生の指導に接し、「価値の多様性を伝える指導は、生徒の認識の幅を広げるのではないだろうか、一人一人の違いを認め合えるクラスを育てることになるのではないだろうか」と改めて感じました。

「特別支援教育は、日頃の指導の中に既にある」

特別支援教育とは特別なものではなく、先生方の指導の中に既にある工夫ではないかと思えます。特別支援センターは今後も、先生方の実践を紹介しながら、特別支援教育について一緒に学んでいきたいと思っています。



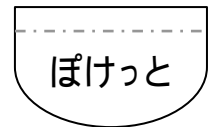
キーワード

『やる気』

小学校の理科の授業。授業の内容は、磁石の特性を活かしたおもちゃを作るというものでした。先生は一人一人に「どういふのを作ろうとしているの？」と構想を聞きながら、「おもしろそうだね。じゃ、がんばって続けて」「なるほどね。でもそういうふうにしたいなら、ここに切り込みを入れて作ったほうがうまくいくかもしれないね。カッターを使ってみてもいいよ」など、肯定的に評価したり助言したりしていました。しばらくして、授業終了のチャイムが鳴りました。先生は挙手によって一人一人の気持ちを確認した後、「終わりたい子」には次の行動の指示、「まだやりたい子」には取り組みの延長時間の設定と行動の指示を出して、授業を終えました。次の授業で教室に入ると、みんな学習の準備をして席についていました。

デシ (Deci, L.) という心理学者は、やる気について次のように述べています。人にやらされていると感じることで、その活動に対するやる気が低下する。その活動に対する有能感やその活動に関して自己決定しているという感覚をもつことで、その活動へのやる気が高まる。しかし、まず「勉強するように」という働きかけが必要な子もいます。その時、その感覚を持たせる指導・工夫をすることが大切になってくるのではないかと思います。

上記の授業では、肯定的な評価、児童がよりよい作品を作るための助言、「終わりたい子」も「まだやりたい子」も達成感をもって活動を区切れるような指示がありました。これらはやる気を高める要素であり、このような特徴の指導の積み重ねがどの授業にも意欲的な子どもたちの態度を形成してきたように思いました。



ぼけっと

特別支援教育

発達障害のある子どもへの支援



平成 19 年度に特別支援教育の制度が開始されて以来、発達障害のある子どもへの関心がとても高まったように感じています。一方で、「特別支援教育」は「発達障害のある子どもへの支援」の代名詞のように受け取られているように感じることもあります。

特別支援教育は「特別な教育的ニーズのある子ども」への教育であり、発音に誤りのある子ども（構音障害）、思うように身体を動かせない子ども（肢体不自由）、不安が強い子ども等も対象に含みます。例えば構音障害や吃音の子どもも、特性に応じた支援が得られないと、自信を失ったり話す意欲が低下するなどの二次的問題を抱える点では、発達障害のある子どもと同様です。

また、学校生活に困難さを有する子どもがいる一方、教育的ニーズをもつが、学校生活にあまり困難さが無いように見える子どももいます。いずれの場合も、かかわる人たちが子どもの特性に対する支援だけでなく、学校生活をより豊かにするための支援について知恵を出し合っていくことは大切であると考えます。特別支援センターにお手伝いできることがありましたら、今後も気軽に声をかけていただきたいと思います。

（文責：心理士 太田真紀）

巡回相談のご案内

特別支援センターの心理士・研究主事などが、授業観察、発達検査及び聞き取りなどを通して発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約 情報共有 日程調整 巡回訪問（状況により継続相談）

特別支援センター： 664-1615（直通）

